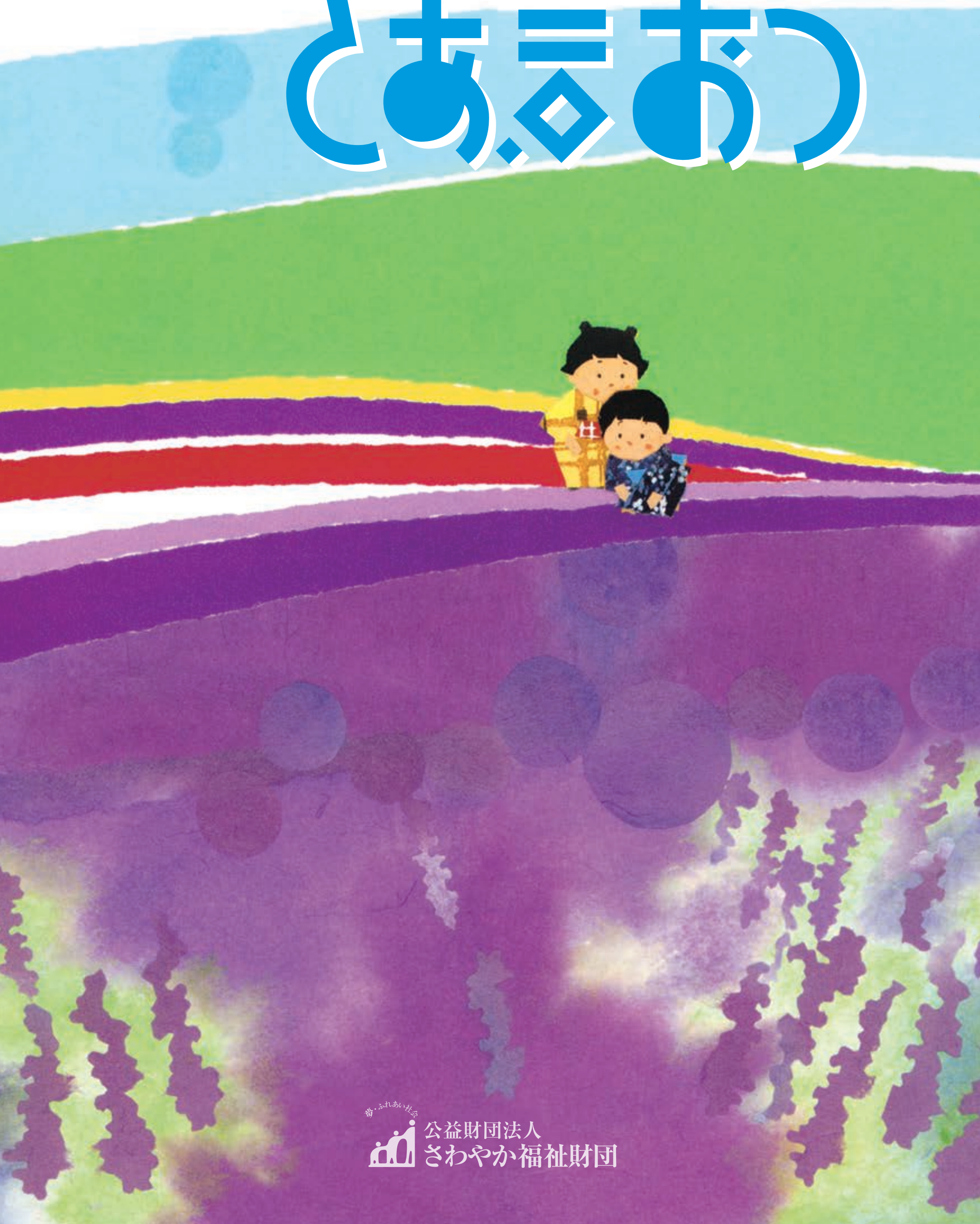
2024
6
令和6年6月10日発行（毎月1回10日発行）　通巻370号

人生100年時代　共生社会の生き方情報誌

さあ言おう



夢・ふれあい社会
公益財団法人
さわやか福祉財団

さわやか福祉財団

2024年度
全国交流フォーラム開催

ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりに向けて

2024年 7月8日（月） 13:30～18:00
（開場 13:00）

皆様のご参加をお待ちしています！

住民主体の地域づくり、助け合い活動の楽しさや必要性を共有し、取り組みを各地で広げていけるように、地域共生の推進、助け合いの拠点づくりに向けて皆様と一緒に考えます。

＜プログラム＞ 第１部 **さわやかフォーラム** 13:30～15:40

報告・トーク **「住民主体の地域づくりを推進しよう」**

理事長 清水肇子、常務理事 鶴山芳子、各事業担当リーダー 等

第２部 **さわやか交流会** 16:00～17:30

＜場　所＞ 第１部：**KFC Hall** 第２部：**第一ホテル両国**

（東京都墨田区 地下鉄「両国」駅・ＪＲ「両国」駅最寄り）

＜参加費＞ 第１部：無料

第２部：運営協力金として2,000円（当日受付にて）

＜申込締切＞ **6月25日（火）** ※定員に達し次第締め切りとさせていただきます。

- 第１部のみ、第２部のみのご参加も可能です。
- さわやかパートナーをはじめとするご支援者の皆様には、５月下旬に案内状（申込書）をお送りしております。
- 財団ホームページもあわせてご覧ください。
- 内容は変更になる場合がありますのでご了承ください。

参加申込フォーム

お問合せ 電話（03）5470-7751 全国交流フォーラム担当：小野島、小林、大石

お申し込み 「全国交流フォーラム」宛
FAX（03）5470-7755 メール sw@sawayakazaidan.or.jp

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

さぁ、言おう

2024年6月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道
子どもを社会の力に 小山内美江子さんを偲んで
清水 肇子

4 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から
1つのまちに2つの助け合い活動で 地域住民の暮らしを守る
おもやいネットよしい・よしいこ会（長崎県佐世保市）

10 助け合い こんな活動やってます!
地域に根を張り 空気のようにあるニーズに応える
認定ＮＰＯ法人すずの会（神奈川県川崎市）

14 いきいき わくわく 子どもと一緒に地域で輝こう
みんなで集まり、竹林の魅力を未来へ
藪の傍（京都府向日市）

20 居場所のつながりを地域へ 「実家の茶の間・紫竹」終了プログラム 1
新潟市「実家の茶の間・紫竹」が活動終了
居場所のつながりをどう地域に落とし込むか

26 連載 共生社会 ―認知症との新しい向き合い方 2
認知症に関して私が関わったこと、考えたこと
社会医療法人財団石心会理事長・川崎幸クリニック院長 杉山 孝博

28 連載 人生100年時代を生き抜く知恵 ジェンダーの視点から 22
詐欺にご用心 その2 お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子

30 連載 人生100年 地域とつながる施設とは 2
特養ホームは多くの市民の拠り所 公益財団法人Uビジョン研究所理事長 本間 郁子

新しいふれあい社会づくりに向けて

22 「地域助け合い基金」
助成先のご紹介／状況のご報告

34 ご支援ありがとうございます。
さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

35 活動日記（抄）

⑬財団ツール紹介
㊵寄付のご案内
㊶みんなの広場 / 投稿募集
㊷さわやかパートナー・
『さぁ、言おう』のご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう! 新・ひとりごと ● 池口 武志

子どもを社会の力に
小山内美江子さんを偲んで

さわやか福祉財団　理事長　清水　肇子

小山内美江子さんが亡くなられた。ＮＨＫの連続テレビ小説や大河ドラマをはじめ民放各局で数々のヒット作の脚本を手がけ、中でも「３年Ｂ組金八先生」シリーズは、子どもたちの率直な叫びや社会環境の歪みを強力に問題提起した伝説的なテレビドラマとなった。また、認定ＮＰＯ法人ＪＨＰ・学校をつくる会を立ち上げ、カンボジアなどに約４００棟の学校建設を進める等のボランティア活動を60歳を機に精力的に行ってきたことでも知られている。こうしたすばらしい活動や功績は様々に報道されているが、実は、さわやか福祉財団でもご縁をいただき、子どもを育む教育のあり方、社会の支え方について、共に強力に提言を行ってきた。

当財団が２００５年に設立した「総合的な学習の創造的な展開を推進する会」と、この会を発展させて翌年に結成した「教育再生民間会議」では、小山内美江子氏、嶋野道弘氏、牟田悌三氏、そして当財団の堀田力理事長（当時）が４代表となり、総合的な学習の時間の充実や教育全般のあり方を提言してきた。国が脱ゆとり教育として02年に始まった総合的な学習の時間を見直す動きに対して、緊急提言を強力に展開。押さえつけた管理主義や知識偏重の教育がい

かに子どもたちの心を歪め、数々の問題を引き起こしてきたか。その反省から生まれた新しい教育の流れを過去に戻してはいけないと小山内さんも危惧していた。総合的な学習の時間は、子どもの人間力を高めるために充実させる必要があるとして、教育全般について独自の考えをまとめ、国の中央教育審議会の関連部会や文部科学省他に提言書を提出した。

その時に提言した新しい教育の基本的な姿、親や学校の教育、地域や社会の教育力の考え方は、まさに今求められている知識から創造性への転換だ。「年齢の異なる者が交わりの中で適切に自己主張し、適切に協力し合いながら、自助、共助の在り方を自ら体得することは、人間力を効果的に高める最高の方法」であり、「地域社会、近隣地域の人々が子どもたちの教育に参加することは、子どもたちの人間力を総合的に高めるために不可欠」だとうたっている。

また、小山内さんは、ご自身の苦労から女性の社会進出にも関心が深かった。当財団の全国交流フォーラムにも多忙な中でよく駆けつけてくれたのだが、ある時、小山内さんを囲む多くの参加者からすっと外れて、すぐ近くにいた私に、「あなたの立場は上から下から横から大変なことがよくわかる。頑張ってね。何かあれば言って。何でも聞いていいから」と、やさしい笑顔で言ってくれたことがある。数分の出来事だが今でも心に残るエールとなっている。

小山内さんは、一人ひとりが伸び伸びと自分を生かせるような社会への思いを強固に持たれている方だった。未来を担う子どもへの慈しみも、決して一方的に庇護すべきとは言わない。「子どもがいきいきとしている顔ってすばらしい。子どもたちに大人が学ぶことは多い」と、むしろ子どもたちの存在や声が社会づくりの道しるべになると言われていた。私たちが社会で子どもの育ちを応援するときに、忘れてはいけない視点だと改めて噛みしめている。

1つのまちに2つの助け合い活動で地域住民の暮らしを守る

おもやいネットよしい・よしいこ会（長崎県佐世保市）

炭鉱のまちとして戦後の復興と高度成長期を支えた長崎県佐世保市の北部のまちは、2005年から10年の間に次々と佐世保市と合併。生活支援体制整備事業が始まって以降は、住民主体の生活支援団体がいくつも立ち上がっています。21年に生活支援の有償ボランティア団体を立ち上げた吉井町は、22年には外出支援のニーズにも応える団体が活動をスタートしました。

（取材・文／東田　勉）

〝おもやい〟の気持ちで暮らす

佐世保市吉井町は、人口約5000人で高齢化率37・0％（2023年8月現在）。約10年前、隣の世知原町（せちばるちょう）と一緒に佐世保市と合併した。近隣の宇久（うく）、小佐々（こざざ）、江迎（えむかえ）、鹿町（しかまち）などと同様、市の中心部から離れていることもあって、自分たちのことは自分たちで、という気風があり、昔から互助の精神が根付いているという。

吉井町に30分250円の有償ボランティアで住民の生活支援活動をする「おもやいネットよしい」が生まれたのは、21年12月のこと。〝おもやい〟

とは、誰かと「共同で」「一緒に」何かすることを表す長崎の言葉。海に囲まれた地で暮らす当地の人たちは今でも、2隻以上の船をつないで運行する「舫い船」を語源とするこの言葉を使うそうだ。

取材した日は、町内の西野雪枝さん（91歳）宅で、おもやいネットのサポーター山崎廣孝さん（74歳）と赤木郁夫さん（66歳）が、庭の草取りと庭木の剪定をしていた。2人とも団体名の入ったグリーンのベストを着用し、草刈り道具を持参して、縁側から「そこの花は残して、周りの草は取って…」と頼む西野さんの希望を聞きながら手慣れた様子で作業している。西野さんは、15年前に夫が亡くなってから一人暮らしだ。

「80歳までは私も元気で、庭に花や野菜をいっぱい作りました。ここ数年は娘たちが来て草取りをしてくれていたけど、おもやいネットができてからは気軽に頼めてありがたいです」

西野さんは、通っているデイサービスで「すごく助かっているのよ」とおもやいネットのことを話したそうだ。

「このあたりの家は庭が広いので、一人暮らしになったら草取りが大変です。果物なども育てているから、除草剤は嫌われますしね」とサポーターの山崎さん。

「子どもの頃から家の農作業を手伝っていましたから、草取りはお手のものです」と赤木さん。2人とも、この活動の魅力を「喜ばれるし、健康にいいですよ」と笑顔で語る。

利用者の西野さん

サポーターの赤木さん（左）と山崎さん（右）

外出支援のニーズにも応える「よしいこ会」を立ち上げ

翌22年8月、吉井町にもう1つ、「よしいこ会」が立ち上がった。名称は、「吉井」と「よし、行こう！」のかけ言葉。おもやいネットとの違いは、外出支援も行っている点だ。

支援内容は、草取り、ごみの分別やごみ出し、部屋の片づけ、書類の説明、見守りなど、おもやいと同じメニューが並ぶほか、サポーターが自家用車で行う買い物・通院の支援、買い物代行や薬の受け取り支援がある。

当日の利用者は中村恵美子さん（79歳）。急な坂の上にある一軒家で、両親が亡くなった30年前から一人暮らしを続けている。和食の板前だった中村さんは、ずっと独身で子どもはいない。2年前に左股関節を人工関節に置き換える手術を受けたが、それ以来、杖歩行になりバス停まで歩いたり荷物を持ち運んだりすることが難しくなった。整形外科、内科、眼科など通院も月4～5回ある。

「今日は隣町の歯医者さんに行きます。サポーターさんが院内で付き添ってくれるし、帰りはスーパーに寄って1週間分の買い物を手伝ってくれます。買った物を家の中まで運んでもらえるのも本当に助かります」

利用者の中村さん（左）とサポーターの川﨑さん（右）

この日のサポーターは川﨑博司さん（77歳）。長年、損害保険会社に勤め、定年後は民生委員をしながら障がい児施設などで送迎ドライバーをしてきた。

「吉井町は病院が少なくスーパーも1軒だけ。外出支援は隣町まで行くことが多く、長距離ドライブになります。私は車が好きなので全く苦になりませんし、利用者さんも車内でたくさん会話ができると喜んでくれています」

地域の会議で課題とされていた通院と買い物の不便さ

吉井町では、かねてから「地域支え合い推進会議」（第2層協議体）を年数回開き、地域の課題を話し合ってきた。そこで通院支援や買い物支援のニーズの多さは把握していたが、おもやいネットでは安全への懸念など、なかなかハードルが高かった。

風向きが変わったのは22年6月。近隣の鹿町で、生活支援有償ボランティア団体「さわやか・しかまち」が外出支援を始めたことだった。

「自分たちも外出支援が実現できないか」。そう考えたおもやいネットの主要メンバーは、住民主体で外出支援を行うにはどうしたらいいか、吉井町の第2層SC、立木昭夫さん（64歳）に調べてもらった。運輸局の見解等も踏まえた結果、生活支援を一体的に行うことでやれそうだ、ということになり、地域支え合い推進会議の外出支援作業部会で意見交換を実施。「難しいけれど必要だ」という意見が多かったため、

よしいこ会の発足が決まった、
おもやいネットのサポーター会

従来からあった自治協議会のふくし部会で立ち上げ準備を始めた。

よしいこ会会長の川内野公隆（かわちのひろたか）さん（47歳）は、その経緯をこう語る。

「外出支援で自家用車を使うとなると、長距離の支援でのガソリン代なども考慮した謝金設定が必要になります。ですが、おもやいネットの外出支援以外の謝金も同様の金額に引き上げるのは、利用している人のことを考えるとしのびなく、それなら別団体でいこう、ということになったのです」

同年8月には、おもやいネットのサポーター会を開催し、よしいこ会についての説明。その場で取り組みに賛同し、サポーターとして活動できるか確認したところ11人の手が上がり、その日が即、よしいこ会の発足日となった。

吉井町第２層ＳＣの
立木さん

よしいこ会会長の
川内野さん

2団体が協力して安心のまちに

今年4月時点で、おもやいネットの利用者（登録者）は54人、サポーターは38人。よしいこ会の利用者（登録者）は36人、サポーターは14人。2団体の累積活動数は、3月までに700件以上。よしいこ会の外出支援（通院・買い物）が一番多くなっている。利用受付窓口は、2団体とも事務局を担うSCの立木さんが持つ携帯電話だ。依頼内容が外出であればよしいこ会で受け、その他の生活支援の場合は内容によってどちらで支援するか決めているそうだ。

2団体とも、支援内容がLINEグループでサポーターに共有され、対応できるサポーターが手を上げる。謝金は8割が活動翌月にサポーターに渡され、2割は運営費に充てられている。

取材日の午後、おもやいネットの会長として対応してくれたのは、午前中に中村さんの外出支援をしていた川崎さんだった。おもやいネットのサポーターでもあるのだ。よしいこ会のサポーターの午前中の外出支援は2時間45分かかっ

たそうだ。
川﨑さんと立木さんに、活動を始めてから思いもよらなかったニーズはなかったかとたずねてみた。

「病院で受診する順番を取る支援ですね。江迎町には高齢者に人気の病院があるのですが、そこの先生は丁寧に診てくれることもあって2～3時間待ちが普通。よしいこ会でずっと付き添うと謝金もそれだけかかってしまいます。そこで、おもやいネットで診察券を預かり、朝一番に病院の受付へ出しに行くのです。受付の方が何人待ちか教えてくれるから、時間を見計らってよしいこ会がご本人をお連れして付き添う、というやり方をしています」

これが好評で、現在5人ほど利用者がいるという。

この病院以外の利用医療機関は市内にいくつかあるが、かなりの距離で元気な高齢者でもバスの乗り継ぎが大変だ。よしいこ会の通院支援は、院内にも付き添い、要請があれば診察室に入って医師の話を本人と一緒に聞き、内容を家族やケアマネジャーに伝えてもくれる。

こうして、同じ地域の2団体が互いにできることで連携して、利用者の立場に立った支援を実施している。

おもやいネットによるお墓の掃除支援

よしいこ会による買い物支援

小さくても熱い思いが住民を動かす

佐世保市第1層SCの成冨(なりとみ)努さんに、おもやいネットとよしいこ会の良さを聞いた。

「それは、やはり住民主体の活動だということです。一度に地域全体を動かすのは難しいので、最初に『この人の思いを実現したい』と思える人を見つけ、小さな活動の実現を行う。そして、その活動を皆さんに伝えてもらうと、小さいけれど熱い思いが皆さんの気持ちを動かします。吉井町の場合は、S

Cの立木さんがその熱意を持った地域住民だったことも大きかった。これからの地域づくりの良いお手本になりました。おもやいネット、よしいこ会と、着実にステップを踏んで、段階ごとにしっかりと合意形成してこられたことも素晴らしいと思っています」

佐世保市第１層ＳＣの成冨さん

立木さんは小学校の教員として勤務し、60歳で定年退職。地域活動がしたいと考えていたところに、市社会福祉協議会から第2層ＳＣの話が舞い込んだ。おもやいネットは、立木さんの住む吉井町上橋川内地区で当初16人の有志によって始まったそうだ。

「私は、ＳＣであると同時に吉井町の住民ですから、これからもわがまちのために皆さんと頑張っていきたい」

連携と工夫で、地域住民の暮らしを自分たちで守ろうと取り組む吉井町。今後も活動の広がりに期待したい。

おもやいネットよしい・よしいこ会

＜おもやいネットよしい＞
2021年12月に発足した有償生活支援ボランティア団体。吉井町に住む一人暮らしや高齢者のみの世帯、認知症高齢者、障がい者（児）、子育て世帯、子どもなどで困りごとがあり助ける人がいない人が対象。支援内容は見守り、ごみ出し、買い物代行、書類の説明や作成手伝い、洗濯・掃除、庭の草取りなど軽めの支援。謝金は60分500円、30分250円、15分以下無料。定期利用はチケット制、都度利用は現金で支払い。

＜よしいこ会＞
2022年８月に発足した、外出支援も可能な有償生活支援ボランティア団体。対象地域は吉井町と世知原町、江迎町の吉井町側。対象者はおもやいネットよしいと同じ。支援内容は、おもやいネットよしいでは支援が難しかったもの。例えば外出（通院、買い物）支援、物が多い部屋の片づけ、大量のごみ出し、機械を使うような広い庭の草刈りや茂った樹木の剪定など。謝金はチケット制で、基本60分以内1000円、60分を超えると15分ごとに250円。

●連絡先
〒859-6311
佐世保市吉井町橋川内570-4
電話　090-3799-8565
受付時間　月～金曜日8:30～17:30
　　　　　土曜日8:30～12:30

地域に根を張り空気のようにあるニーズに応える

認定NPO法人すずの会（神奈川県川崎市）

誰もが「安心して暮らせる地域」を望む。「安心」とは人によっていろいろだが「不安なときに、誰かに話したら気持ちが軽くなった」という経験は誰にでもあるのではないだろうか。日常で話せる人や場がご近所にあれば、安心が広がる。また、暮らしの中で「気になる人やコトを見て感じると、放っておけない」性分であり、地域に根を張り〝暮らしアンテナ〟を立てて、気づき動く人を「世話焼きさん」という。どの地域にも必ずいる住民の力を生かし、小さな単位から広がる地域づくりの実践例から、安心して暮らせる地域について考えてみたい。

気軽に鈴を鳴らして

「ご近所のつながりを復活させたい」。都心のベッドタウンでもある川崎市宮前区野川地区を中心に、高齢者や障がい者、その家族をお互いに支え合い、誰にでも優しいまちづくりネットワークを目指して、地域の特性に合ったボランティア活動を展開している「認定NPO法人すずの会」。代表の鈴木恵子さんは30代の頃、家族4人の介護や、交通事故に遭ったときPTA仲間などご近所に助けてもらった体験から「ささやかなつながりやお手伝いがあれば、在宅介護は続けられる」と1995年、仲間と共にボランティアグループを立ち上げた。「困ったときに気軽に鈴を鳴らしてください」という思いを込めて、「すずの会」と名づけた。

すずの会代表の
鈴木さん

気になる人を真ん中に

どの地域でも、孤立しがちな高齢者や障がいがある人、子育て中の人、介

護をしている人など気になる人が増えている。すずの会では設立当初から、川崎市の高齢者のための施設「いこいの家」を活用したミニデイを実施してきたが、ミニデイに参加するのも難しい人がいるという課題が出てきたことから、「ご近所で開けば参加しやすい」と2004年、ご近所サークル「ダイヤモンドクラブ」を始めた。約束事は、「気になる人を1人加えること」。手挙げ方式で世話焼きさんの自宅を開放し、心配な人がいたら声をかけてお茶飲みをすることで、ご近所で気にかけ合う関係が始まる。まるで井戸端会議文化の再現のようだが、「毎月必ず開くと近所の監視になってしまう」と開催は不定期。ゆるやかに気にかけ合う関係である。

すずの家では皆、思い思いに過ごす

豊かな生活に欠かせないもの

「国の施策が病院医療から地域へと転換してきた今だからこそ、できるだけ小地域で最後まで見られるような体制づくりが重要」と考えた鈴木さんは、14年に「拠点が必要」と空き家を活用した「すずの家（や）」をオープン。活動を続ける中で、一人暮らしや認知症の人など気になる人たちが増えていることを実感したのがきっかけだ。要支援・要介護者等を対象としたこのミニデイは、全国からの視察も多い。現在、ボランティアは40名程度で週2回開催、手挙げ方式での参加が基本。終了後に開く振り返りでは、参加している人たち一人ひとりの状況や、ボランティアの関わりで気になることを共有。本音の議論が、関わる人たちの信頼関係を築いている。

すずの家がスタートして10年。要介護者の割合が多い参加者だが、過ごし方は正に「自由」。トランプをしている人、ゆっくりくつろいでいる人、時折大きな笑い声も起こる。

「1日のプログラムは決めない。それが売り」という鈴木さん。要介護度に縛られず、当人の豊かな生活（自己実現）を目指している。「私がこれをしたい」というつぶやきをキャッチして実現できるようにすることが、心ときめく1日を過ごすお手伝いにつながるという。99歳で一人暮らしの男性も常連。お風呂はここで入る。週2回のすずの家に加えて、介護保険の訪問介護や訪問リハのサービスも受けているが、すずの会による助け合いの訪問支援、

ご近所の定期的な見守り、自費でのヘルパー支援なども受けながら暮らす。

食事作りと食事の様子

すずの家に貼ってある美しい景色や花などの写真はこの男性が撮り、パソコンを使ってプリントアウトしたものだと自慢げに話してくれた。

　ここに来ている人たちは、皆それぞれ必要とされている。助け合いによる訪問支援について鈴木さんは「ヘルパーは決まった仕事をしに来るから、一緒におしゃべりしたりお茶を飲んだりできない。でも、そういう平凡な時間が必要なのだと思う」と語る。ご近所やすずの会など、地域の関わりがあることが豊かな生活をつくっている。

素人だからいい

　ミニデイの振り返りなどからニーズを見つけ、活動に落とし込むすずの会。「ニーズは空気のように自分たちのまわりにある。誰かが『やりましょうよ！』と言い出し、それにみんなが賛同するから今までがある」という鈴木さん。ただの〝おばさん〟として地域に根を張っていることが、ニーズの気づきに有利だそう。世話焼きさんが持っている好奇心が、ニーズを発見させる。継続的に接触しているから、ちょっとした変化が見える。

　すずの会の活動の基本は、普通の生活感覚を失わないこと。必要であれば専門知識を学び、地域の専門機関や介護事業者と関係を結び、地域の問題は地域全体で同じテーブルに着いて話し合ってきた。住民主体の地域づくりをベースとした地域包括ケアこそ、在宅で安心して自分らしく暮らせる地域になることを教えてくれた。

（取材・文／鶴山　芳子）

参考資料：『ご近所パワー活用術　―すずの会流・福祉活動の手法―』（すずの会著・出版：年友企画）、「『気になる人を真ん中に』住民主体の地域包括ケアの実践　ボランティアグループすずの会（神奈川県川崎市宮前区）」（健康長寿ネット「元気な地域あれこれ」）

助け合いの地域づくりに、当財団のツールをぜひご活用ください

当財団ＨＰトップページ「ライブラリー」→「各種広報ツール」から無料でダウンロードもできます。「新・助け合い体験ゲーム」は 1,100 円（税込・送料別）となります。

みんなでやってみよう！
訪問助け合い活動

お互い様の気持ちを一歩進めて、自身の生活も、困っている誰かの生活も豊かにする「訪問助け合い活動」。主に高齢者の家の中で行う助け合い活動について詳しく解説しています。講師用解説書もあります。

いつでも誰でも行ける場所を広げよう！
居場所ガイドブック

地域の絆を深め、助け合う関係を広げるための共生型常設型居場所をつくりましょう。居場所のつくり方、事例、活動への支援のあり方など、実践ノウハウが分かるガイドブックです。

新・助け合い体験ゲーム

地域の助け合い活動における、ニーズと担い手発掘を体験できるゲームです。助け合いをつくる関係者の研修や住民勉強会等で、効果的に活用していただけます。

【お問い合わせ・お申し込み】
電話（03）5470-7751　メール mail@sawayakazaidan.or.jp

いきいき わくわく

子どもと一緒に地域で輝こう

みんなで集まり、竹林の魅力を未来へ

藪の傍（京都府向日市）

京都市内からほど近い住宅地の竹林に竹好きの人たちが集まり、活動の場をつくりました。大人も子どもも一緒に竹林の魅力を再発見しながら推し進める、ふるさとづくりの取り組みを取材しました。

（取材・文／境 朗子）

初夏の澄んだ光が柔らかく差し込む竹林の中、風がサラサラと笹の葉をそよがせる。ここは京都府南西部の向日市物集女町に広がる竹林。荒れていた約２ヘクタールの竹林を、２０１８年から任意団体「藪の傍」が借り

●力を合わせて美しい景観を取り戻そう

「みつけた！」。子どもたちが地面から10センチほど頭をのぞかせたタケノコを発見。握りしめた鍬で掘り取ろうと大張り切りだが、思った以上に土は硬い。タケノコと格闘し、ようやく掘り出すと「やったぁ」と歓声を上げた。

タケノコをゲット

寺崎さん（左手前）が参加者にタケノコの掘り方をアドバイス

籔の傍代表の小関さん

東洋竹工会長の大塚さん

受けて整備を続け、参加者が多彩な活動を展開する「居場所」として見事に蘇らせている。丘陵を覆う竹林の斜面の中ほどが活動拠点の集いの場、斜面を少し上がったところがタケノコ畑、さらに奥へ進めば整備中の竹林となる。

午前中、タケノコ掘り体験に来たのは京都市の絵画教室の親子たちだ。「掘るのがこんなに大変だって知らなかった。でも面白い。また来たいです」。小学生たちの満足げな様子に、掘り方をアドバイスしていた活動の常連、寺崎正直さん（76歳）は目を細める。「子どもたちに掘る体験をしてもらい、竹が伸びたら今度は竹で何か物を作る楽しさも経験してもらいたいな。竹はほったらかしでは駄目で、手入れをする必要があることも知ってほしい」と話す。

物集女エリアは、歴史ある竹の産地だ。しかし都市開発が進み、住宅地は竹林のある丘陵へ徐々に迫っていった。「高齢化で後継者が足りず、竹産業も衰退し、放置竹林が増えました。美しい竹の里の文化を守り育てることはできないだろうか。そう感じた竹好きな人が集まり『籔の傍』が生まれたのです」と語るのは、籔の傍代表の小関皆乎（こせきみなこ）さん（77歳）。

小関さんは、滋賀県近江八幡市で酒蔵や町屋を改装しながら、竹林再生などの活動に関わってきた。そんな折、SNSで「たけのこ」というハンドル名に目がとまり、メッセージを送ってつながったのが、向日市で竹製品の製造業を営む東洋竹工株式会社の大塚正洋会長（76歳）である。

これまで、みんなで竹の遊具作りも

「大塚さんや京都建築専門学校の校長、地権者の方たちと一緒に大塚さんの地元であるここに来てみたら、うっそうとして足を踏み入れるのもためらうような竹藪でした。このままではいけない、と皆で話しました」と小関さん。地権者にも好意的に受け止められ、少人数で倒れた竹を片付け、古竹を間伐して整備してきた。同時に「子どももも大人も竹の大切さや面白さを知ってほしい」と皆でアイデアも出し合った。竹林に親しみが持てるように、ハンモックやブランコ、竹の冒険小屋も設置した。タケノコ栽培教室や竹編み講座を開催、竹林道の竹垣作りも行い整備すると、参加者が増えていった。

●竹林の中の桟敷で合気道

「エイ！　エイ！」子どもたちの凛とした気合が竹林に響き渡る。活動拠点の集いの場に設けられている18畳の竹桟敷（畳敷きの稽古場）で、合気道の稽古が行われているのだ。

合気道向日町教室の主宰者、竹田明敬さん（50歳）は市の広報誌で竹林活動を知り、気軽な気持ちで整備に参加。「そのとき、自己紹介がてら『団体を発足したけれど稽古の場所がない』と話したのです。すると小関さんが『ここに桟敷を作りましょう』と提案してくれました」

すぐに前出の専門学校の校長や学生が作業を買って出て、20年11月、竹の上に畳を敷いた桟敷が完成した。「転がると青空が見える」と、子どもたちはここでの稽古に目を輝かせた。

「子どもたちは、タケノコ畑でわら敷きをしたり、道沿いの溝をきれいにしたりと積極的に手伝ってくれます。今の子たちは、親以外の大人に教えら

竹桟敷で行われている合気道の稽古

合気道向日町教室の主宰者、竹田さん

稽古の後はタケノコのカットに挑戦

れたりすることがあまりない。でもここでは皆さんがきちんと子どもたちに向き合う。親が注意するより耳を傾けるようです」と竹田さん。さらに「ここは多様な方々とふれ合える貴重な場になっています。合気道の技以前に、あいさつや靴をそろえるといった、人としての行儀作法を身につけてほしい」と話す。稽古に通っている小学5年生の子は「ここに来ると、皆さんに竹のことを教えてもらいながらいろいろ手伝いもできます」とにっこり。

●竹を使って子どもの夢と力を育む

竹の小屋では、1メートルほどに伸びたタケノコを採取してメンマ作りのワークショップを行った後、タケノコご飯が振る舞われていた。竹で作った二胡を奏でながら場の雰囲気を心地良く盛り上げているのは、岐阜県で林業に携わる台湾人の李皓綸（リハオルン）さん（35歳）。活動にときどき参加して子どもたちに竹の知識を伝えたり、ときには英語を教えたりする。

「竹は何もしないとごみになっちゃうけど、使えば財産になる。カブトムシだって竹林を頼って生きているんだよ、といったことを子どもたちに説明すると、みんな興味津々です。本を読んだだけでは分からないことを、自分で見て考える楽しさを経験してほしい」と話す。

「会社を定年退職後、家内に『家にばかりいても

左から、李さん、小林さん、戸毛弘さん。収穫した大きなタケノコを手に

関西でラーメン店21店舗を経営しており、今年から京都産メンマ作りにチャレンジしている久保田雅彦さん。この日もメンマ作りワークショップに参加

仕方ないでしょ』と言われて竹林活動を始めました」と笑うのは、京都市から参加の佐々木幹夫さん（76歳）。今では誰もが認める竹の達人で、小学校に出向いて総合的な学習の時間も担当している。

「身のまわりにある遊具も生活道具もプラスチックばかり。人生何歳になっても、竹の奥深さや豊かさに触れるのは新鮮です。学校の先生とはまた違って、子どもたちはオジイサンの話を一生懸命聞いてくれます」とうれしそうだ。佐々木さんは、地元の小学校で竹トンボを一斉に飛ばすギネス世界記録に挑戦する立役者としても活躍。何と631人が成功して堂々認定された。「子どもたちには、知らずにいた素敵なものに触れて挑戦してほしい。『お母さんお父さんにダメと止められるなら、挑戦した後に、これができるようになったよ、と胸を張って報告すればいいよ』と言うと『味方がいた！』とばかり喜んでくれます」

佐々木さん

　前出の大塚さんは「竹トンボも、作った、飛んだで終わらずに『なぜ飛ぶんだろう』という問いを引き出さないと発見がないし、面白くない。ワークショップにしても、時間の制約の中でちょっとやらせて完成品を手渡すのでは哲学がないでしょう」とズバリ。「竹林では小学校低学年でもノコギリを手に動きまわります。斜面で大人はつまずくけど、子どもは身軽でコケません（笑）」と大人の過保護ぶりを残念がる。

「子どもの感性が豊かで真っすぐなのには感心します」と話すのは、西田博信さん（67歳）。近くの住人で、たまたま通りかかって活動を知り「時間の流れが全然違う世界がある」と感じて籔

西田さん

の傍に参加した。「子どもを驚かせたくて『竹は木だと思いますか？　実はイネの仲間なんだよ』と説明すると、『竹は竹でーす！』と返ってくる。僕のほうが既成概念に毒されていたと気づくわけです」と苦笑する。吹く風、竹の匂い――。大人も子どもも五感で体感すると、心身が開いて素直になるという。

会社員の小林修平さん（43歳）は、シニアの活動ぶりに驚く。「ただただ竹が好きで集まって、得意なことを持ち寄る。誰が仕切るわけでも、えらいわけでもなく、自然体で交流しながら次々とチャレンジする。教えていただくことばかりです」

● 大学生ともコラボ

この日の合気道の稽古には、大学３年生の岸本健太郎さんと上垣内（うえがいと）祐介さんがインターネットで情報を得て、竹林での稽古に惹かれ大阪から初参加していた。「シニアの方々が若い人たちにいろいろなことを優しく教えていらっしゃいますよね。僕たちはシニアの方とふれ合う機会がなかなかないのでうらやましいです」。その後、２人はタケノコ掘りも体験し、「また来ます」と大満足で帰路へ。常連さんがまた増えるかもしれない。

合気道の稽古に初参加した大学生の２人

京都府は、地域活動団体と大学生がチームとなって地域活動に取り組む「学生×地域つながる未来プロジェクト」を毎年実施しているが、藪の傍は21～23年度にその活動団体としても取り組んできた。

「今年、大学を卒業して会社員になった若者に『入社してすぐに、何をしたらいいか自分で考えることができました。竹林活動をやってきたおかげです』と感謝されました」と小関さん。「子どももいずれ大人になり、高齢者になります。今、子どもたちのふるさとを一緒につくっていると思っています」と語った。

居場所のつながりを地域へ
「実家の茶の間・紫竹」終了プログラム 1

新潟市「実家の茶の間・紫竹」が活動終了

居場所のつながりをどう地域に落とし込むか

さわやか福祉財団常務理事
共生社会推進リーダー
鶴山 芳子

「10月30日（水）をもって実家の茶の間・紫竹は10年の活動を終了いたします。10月は祝日を含めて9回の開催。そのすべての日を最後の日と位置づけし、実家の茶の間・紫竹で出会うことができたことで、今後の生活でお互いさまと助け合える関係づくりをもう一度確認できる大切な日々としたい。そのためセレモニーはしない」

これは、去る3月18日に行われた新潟市の「実家の茶の間・紫竹」の当番会議で配布された資料の冒頭文章です。

2014年、新潟市は地域包括ケアを推進するために、市内に広がる「地域の茶の間」をベースにしようと、市民であり地域の茶の間創設者でもある河田珪子さんに「『うちの実家（空き家を活用した、当時の常設型の居場所）』をゼロから再現して見せてほしい」と依頼。市と協働で立ち上げた「地域包括ケア推進モデルハウス」の第1号が、同市東区に誕生した「実家の茶の間・紫竹」です。ここを基幹に市内全8区の各区第1層SCがモデルハウスを立ち上げ、地域包括ケアのベースである住民主体の地域づくりを推進してきました。

ここで多くの住民がつながり助け合う関係が広がり、また、地域のさまざまな組織や住民もつながり、住民主体の活動を支援する動きも広がりました。さらに県内外から多くの住民やSC、自治体職員、学生、企業等が視察や相談で足を運び、各地での共生型常設型居場所の立ち上げにも大きな影響を与えました。

なぜ終了か。市はもともと10年間での推進という計

画だったため、と説明しています。
４月22日、河田さんは包括連携協定締結先の当財団、市政策調整監、地域包括ケア推進課長と共に中原八一市長と面談し、「『実家の茶の間・紫竹』終了に際してのプログラム予定」（左表）を説明。市長は10月に紫竹を２回訪問することとなりました。そして５月からは終了プログラムがスタート。当番の人たちが作成した終了プログラムが紫竹玄関の外に貼り出され、皆で共有し動き出します。「プログラムは、皆の意見も取り入れながら充実させていきたい」と河田さん。

この10年、紫竹は共生型常設型居場所のモデルとして当財団も各地で紹介してきた事例の一つです。居場所は人と人との関係をつくることが目的であり、気になる関係から助け合う関係に発展することが大きな効果です。これからは、10月に紫竹が終了しても、ここでつながった人同士が困ったときにはお互いさまと助け合って暮らし続けられることを目指しての総仕上げとなります。つながった人と人との関係を、地域の助け合いにどう落とし込んでいくのか。今月号から随時そのプロセスを紹介していきます。

「実家の茶の間・紫竹」
終了に際してのプログラム予定

４月	市長室へ終了プログラムの予定お知らせ
５月～	●終了の段取り、動きを玄関の外、部屋の中へ貼り出し地域の方々、参加者の方々と共有する。 ●地域の茶の間の立ち上げ、継続、運営に対する研修要請に応える。 ●助け合い活動の立ち上げ、継続、運営に関する研修要請に応える。 ●終了に伴い視察、見学、研修が増えておりできる限り応える。
６月	●障子張り替え ●８月に実施する、バザーのお知らせと協力依頼（売り上げは、自宅等の駐車場など10年間貸してくださった近隣、又、実家の茶の間・紫竹の駐車場を10年間確保してくださった賛助会員の方々や、消雪パイプを実家開催日に使用するよう設置してくださった家主さんにも感謝に使う。さらに、終了お知らせの通信費にも使用。）
７月	●お借りしていた机、いすなど家具、物品をお返しするか確認。返品不要の場合は了解を得てバザーの時にバザー品として予約販売する。
８月	●博進堂さんが作成中の「実家の茶の間・紫竹」の絵本完成予定 ●バザーの実施（目的は物品の片付けと、お世話になった方々への感謝の行事）
９月	
10月	●市長さんに「実家の茶の間・紫竹」に２回おいでいただきたい。 ●終了セレモニー、イベントは行わず、９回すべての日を最後の日と位置付ける。理由は、地域の茶の間（個人の茶の間ではなく、社会性のある茶の間）の、そもそもの目的である「助けて‼」と言える自分をつくる。「助けて‼」と言い合える地域を創る。みんなお互い様なのだから…と。そのために人とつながり、社会とつながる機会を提供する場。小さくなった家族機能、近隣との助け合い機能をもう一度自分事として考え今後の安心を手にする大切な日々としたい。実家の茶の間・紫竹がなくなっても、今後の生活を安心して過ごせるようにしたい。

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会実現のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、林の整備による交流の場づくり、生活支援活動、防犯パトロール等の活動を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

千葉県柏市

「おおぜいで短時間！」林の整備でみんなの交流の場づくり

弓削　規子

助成金額　9万4000円

新青田町会に隣接する「大青田の森」は緑茂る貴重な自然が残っていますが、そこに少し「人の手」を加えるとさらに森が生き返り花々が咲いてきます。雑木やツタなどに絡まれて悲惨な状態だった桜の木を生き返らせ、「大青田の桜広場」と名づけ地域住民の憩いの場づくりをしているのは、同じ町会に住む元気な高齢者の皆さん。

町会の老人クラブ開催のお花見会

町会には以前よりふれあい会館があり、毎週サロンが開かれていました。しかし、コロナ禍の影響によって室内での集会が禁止となり、縁あって地域の人たちで近所の林の手入れをしたことがきっかけで、多いときでは20名ほどが毎月草刈りやごみ拾いなどの活動に参加し、汗を流して広場の整備をしているそうです。

今回の助成金では、作業時の休憩や地域の皆さんに利用してもらうための屋外ベンチや、木の伐採や竹林整備のための電動ノコギリ、標識テープなどを購入し、活動に役立てていただきました。

夏休みには、子どもや若いお母さんたちとミョウガの収穫をして交流のきっかけができ、秋には柿を取って皆で楽しみ、この春には町会の老人クラブがお花見会を開催したそうです。

今後も、「おおぜいで短時間！」をモットーに、高齢者が多いため無理のない形で活動を継続していきます、と報告を寄せてくださいました。

草むしりや枝切りの様子

群馬県高崎市

パトロールでの気づきがお互い様の生活支援活動に

佐野たすけあい隊

助成金額　15万円

佐野地区では、第2層協議体メンバーが中心となり、「無理なく、できる人ができる時間に見守り活動を行ってみよう！」をモットーに、2021年「さのわんパトロール」として見守り活動をスタート。日々活動する中で、身近な地域の様子や、地域の困りごとに少しずつ気づくようになったそうです。そこで、地域包括支援センター等とも連携しながら第2層協議体で話し合い、サポーター養成講座を実施するなどして、22年4月、地区全域を対象として、ちょっとした困りごとを気兼ねなくお願いでき、お互い様で助け合える支援活動団体「佐野たすけあい隊」を発足。サポーターは40名以上集まりました。

草むしりや枝切り、ズボンの裾上げ等の

困りごとに対応し、依頼者の方々からは「足腰が弱くなり、自分でできなくなっていたので助かった」など感謝の声がたくさん届き、またサポーターにとってはいきがいや社会参加の機会にもなっているということです。

今回の助成金では、サポーターの皆さんが活動時に着用する名入りベスト、草むしりや枝切りに必要なハサミやノコギリなどの作業道具、それらを収納する物置等を購入し、活動基盤を整えることができたそうです。

今後は、世代を超えて支え合える地域を目指すという佐野たすけあい隊。地域住民の居場所づくりやサポーターが活躍できる内容を広げていきたい、と報告をいただきました。

岐阜県各務原市

子どもたちを犯罪から守りたい！ 防犯パトロール活動

清住町ふるさと創生会

助成金額　15万円

「清住町ふるさと創生会」は、清住町と近隣地域の整備を行い、安全で安心な生活環境を創り出すことを目的とし、２０１６年に設立されました。設立当初は、生活幹線道路や通学路脇の山林の伐採、草刈り、冬期の道路への融雪剤散布、空き家や高齢者宅の庭の整備作業等を行ってきましたが、近年は、地域で車上狙いや自転車盗難が発生。また、近くのまちでは子どもを狙った犯罪も発生するようになり、子どもを犯罪から守ることも必要となりました。このような身近な犯罪の抑止につながるように5年前から防犯パトロールも始めましたが、寒さが厳しい冬期の早朝・夜間の活動が多く、参加者の体調面が気がかりでした。

今回の助成金では、防寒帽子、ネックウォーマー、防寒手袋、反射タスキなどを購入。団体名と「防犯パトロ

新しい防寒具を身に着けてパトロール

ール中」の文字が入った新しい防寒具を身に着けてのパトロールは「すごく暖か〜い」「冷たい風は全然感じない」と会員に大好評だっただけでなく、住民から声をかけられ、今後は仲間が増えることも願っている、とのことです。

パトロールの回数は原則月1回ですが、春休み、ゴールデンウイーク、夏休み、冬休みは回数を増やして夜間のパトロールも行い、年末は地元自治会と共同で「年末防犯・防火パトロール」を実施している清住町ふるさと創生会。チラシを回覧して後継者育成にも力を入れています。

「地域助け合い基金」状況のご報告

（5月15日　当財団ホームページ開示時点）

◎寄付受付額
243件　1億7422万2836円
このうち当財団より1億4162万1000円を供出

◎助成実行額
1104件　1億7101万7064円

地域助け合い基金は、能登半島地震の被災地・被災者にも支援を実施してまいります。

引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願い申し上げます。

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。

クレジットカード決済ページ

財団ホームページ内基金関連ページ

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、上のコードもご利用ください

基金に関するご意見・お問合せ

地域助け合い基金担当
電話：（03）5470-7751
FAX：（03）5470-7755
メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

共生社会
―認知症との新しい向き合い方

2

認知症に関して私が関わったこと、考えたこと

社会医療法人財団石心会理事長
川崎幸クリニック院長
杉山　孝博

（すぎやま　たかひろ）
1973年東京大学医学部卒。1998年9月川崎幸クリニック院長に、2023年7月社会医療法人財団石心会理事長に就任。1981年から公益社団法人認知症の人と家族の会の活動に参加。全国本部の副代表理事（副代表）。公益社団法人日本認知症グループホーム協会顧問、公益財団法人さわやか福祉財団評議員。著書は、杉山孝博著「マンガでわかる　認知症の9大法則と1原則」（法研）、杉山孝博監修「認知症の人の不可解な行動がわかる本」（講談社）など多数。

1981年初め、地域医療に関して交流のあった京都・堀川病院の早川一光先生から「認知症の人と家族の会（当時、呆け老人をかかえる家族の会）の神奈川県支部を結成したいので手伝ってほしい」という電話をもらったことがきっかけで、認知症とのかかわりが始まりました。

私は学生時代から、「サリドマイド」「スモン」といった薬害問題や水俣病などの公害問題に市民運動として取り組んだ経験を持っていましたので、支部発足の手伝いを気軽に引き受けました。会場を手配し、早川先生を迎え、第1回目の「総会」が開催されたのは1981年4月29日でした。

「認知症は自分たちだけの問題ではなく、みんなが考えていかなければならない問題だ。社会的な理解と援助の輪を作り上げていかなければ安心して介護を続けていけない」―こう考えて県や横浜市、川

崎市などに陳情に行ったのは、日々介護を続けている世話人たちでした。私や保健師、施設の職員などのＢ会員は、家族の人たちの情熱に動かされたというのが実情でした。

当時、私は認知症のお年寄りをあまり診察していませんでしたし、認知症の症状や出現率などの基本的なデータすら知らなかったのです。しかし、在宅ケアを懸命に行っている家族を支えることに医療は一定の役割を果たすことができると考えていました。

ところが、病院の診察室では経験することのできない、家族の思い・率直な希望・医療などに対する不満を直接聞く中で、認知症に対する自分自身の認識の甘さを思い知らされ、パンフレットの作成、「ぼけ相談室」の開設、保健所などの介護教室の講演の引き受けなどに積極的に取り組むようにしました。専門家としての立場から、認知症をめぐる普遍的な問題を抽出して、「認知症をよく理解するための9大法則・1原則」「家族のたどる心理的ステップ」「上手な介護の十二ケ条」などの形にまとめて、認知症の問題をだれにもわかるように努めてきました。

家族の会全国本部では94年に理事、２００５年には副代表理事となり、同会神奈川県支部では２０００年に代表となって運営に携わることになりました。42年前、認知症問題にこれ程までにかかわりを持つとは想像もできませんでした。

45年間に及ぶ認知症の人と家族の会の活動がなかったら、認知症の人と家族の声が社会にどれほど届いたか、気兼ねなく話すことのできるつどいや相談の場がどれほど普及したか、専門職が認知症についてどれほど関心を持ったか、介護保険をはじめ福祉制度が認知症のためどれほど使いよい制度になったか、などを考えると、家族の会の果たしてきた役割は大きなものだったと思います。

切実なニーズに基づいた当事者の気持ちを理解しまじめに取り組めば、20年後、30年後には皆が理解してくれるようになると自信を持って言えるようになりました。家族の会にかかわったお陰だと感謝しています。

人生100年時代を生き抜く知恵 22
ジェンダーの視点から

詐欺にご用心　その2

お茶の水女子大学名誉教授　袖井　孝子

今はやりのサポート詐欺に引っかかりかけたのは、5年ほど前のこと。深夜、パソコンに向かっていると、突然、ビャーという何とも不快な警告音が鳴って、画面が暗転した。そこに「警告！あなたのパソコンがトロイの木馬に感染しました」とまがまがしい赤い文字が浮かび上がった。

あわててあちこちキーを押しまくったが、画面は変わらないし、警告音も止まらない。諦めて強制終了し、数分後に立ち上げたが、状況はまったく同じだ。

ふと右下を見ると、白抜きの画面にはタイルを張り付けたようなお馴染みのマイクロソフトのロゴマークがあり、その下に次の番号に電話をするようにとある。

早速、電話をしたところ、若い男性の声で、ウィルスを除去するには5万円かかると言う。即座に、「高いわね」と言って切ってしまった。

しばらくたって、もう一度電話をしたら、今回は「3万円です」と大幅値下げだ。日本語の発音がおかしいので、「あなた中国人？」と聞いてみ

（そでい　たかこ）
お茶の水女子大学名誉教授、東京家政学院大学客員教授、一般社団法人シニア社会学会会長、一般社団法人コミュニティネットワーク協会会長、ＮＰＯ法人高齢社会をよくする女性の会副理事長。専門は老年学、家族社会学、女性学。主な著書に『変わる家族　変わらない絆』『高齢者は社会的弱者なのか』（以上ミネルヴァ書房）、『女の活路　男の末路』（中央法規出版）、など多数。

たら、「ワタシ、チューゴクジンナイ」と答えて、電話は切れてしまった。
　翌日、サポート契約を結んでいる家電量販店にパソコンを持ち込んだところ、あっという間に元に戻してくれた。そして、同じようなことが発生した場合の対処方法を教えてくれたうえで、今後は絶対に電話をかけることのないようにと注意された。
　その後、1年ほど経ってフィリピン人のサポート詐欺グループが摘発されたと新聞に報じられていた。もしかして、彼らの仕業だったのかもしれない。
　最近の報道によると、サポート詐欺で、百万円を超える大金を失った人がいるという。よほど巧みに誘導されたのだろう。
　ＳＮＳでは、森永卓郎、前澤友作、池上彰など有名人たちが盛んに投資を勧めている。しかし本人たちは全くの偽広告だと抗議している。かねてより「投資には手を出すな。高齢者は普通預金に預けておくのが一番」と説いている経済評論家の荻原博子さんまでが、投資広告に利用されている。
　いずれの広告も短期間で儲けの出る株や投資方法を伝授するという。それならば自分で買ったらいいのではと思う。なかには、生成ＡＩを使った本物そっくりの動画もあるのだから、だまされないよう注意が必要だ。
　ある金融の専門家は、投資に充てる資金は１０0から年齢を引いた額に留めるべきだと説いている。20歳ならば、収入の80パーセントまで投資してもよいが、80歳ならば20パーセントまでということになる。
　若い頃ならば、たとえ失敗したとしても、取り戻すことは不可能ではない。しかし、失敗を取り戻すことの難しい高齢者は、危険なものには手を出さないほうがよい。
　日本政府は貯蓄から投資への流れを創り出そうとしている。その結果、老後の資金を失う高齢者が続出するのではないかと気がかりだ。

人生100年 地域とつながる施設とは 2

特養ホームは多くの市民の拠り所

公益財団法人Uビジョン研究所理事長　本間　郁子

認知症になり、症状によっては在宅で生活するのに限界が出てくる場合があります。

厚生労働省の調査では、精神科病院に入院している人の約28・2％（約7万3000人）が認知症の人だとの報告があります。精神科病院以外で受け入れてもらえる老人ホームはどこか？　その一つが特別養護老人ホームなのです。

特養ホームは、全国に1万823カ所あり、定員は63・2万人、平均要介護度3・97、平均年齢86歳で、認知症の人は75・3％（認知症高齢者の日常生活自立支援別入所者割合におけるⅡ～Mまでの数）です。入居できるのは、要介護度3・4・5の人ですが、認知症があり、家庭での生活が困難な場合は要介護1や2でも特例として入居できます。特養ホームは申込者が増加し、3年以上待つという状況でしたが、最近は、100人定員のところで1年に約30人が入れるようになり、施設によってはすぐに入れるところもあります。

（ほんま　いくこ）
図書館情報大学卒業（現筑波大学）。さわやか福祉財団評議員、学校法人光塩学園評議員。利用者の人権を守るための高齢者生活施設の認証・評価事業を創設。全国の介護施設や市民向けセミナー講師を務める。＜表彰＞2005年国際ソロプチミスト東京受賞、2010年エイボン女性大賞受賞。＜著書＞多数。近著『この一冊でわかる特別養護老人ホームを選ぶチェックポイント』（30ページ）。お申し込みは、AmazonかUビジョン研究所（電話03-6904-4611）へ

特養ホームの大きなメリットは、所得にかかわらず入居できることや、身元保証人がいなくても入居できることです。しかしながら、施設によっては身元保証人がいない人をお断りしているところがあるとの情報もあるので、その場合は、自治体に相談してください。特養ホームは、50％が税金、40％が介護保険料、10％が利用料となっており、すべて国民のお金を原資として運営されているため、経営よりも公共性の高い事業ができるように自治体、社会福祉法人、ＪＡ厚生連、日本赤十字社の限定した4法人しか運営できないようにしています。

長生きすればするほどに多くの国民にとって最期の拠り所になる特養ホームですが、そこでの暮らしは私たち市民になかなか伝わってきません。それなのに、メディアから伝わってくるのは、老人ホームで起きる悲惨な虐待です。

「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」（高齢者虐待防止法）が施行されたのは２００６年です。その後、厚生労働省は、法律に基づく調査結果を公表しています。２０２２年度、特養ホームで虐待と判断されたのは２７４件で、これまでで最も多く増加傾向にあります。その間、ただ一度だけ２０２０年度は減少しました。その理由は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、家族・親族の訪問が制限されたことで、通報・相談件数が少なくなったことが影響しているものと分析されています。

家族の目さえもない閉鎖的で密室化した環境の中では虐待が発生しやすく、また、虐待が発見しにくくなることは明らかです。

今後、単身世帯が増え、家族がいても協力できない人も増えていくことが想定されている中で、安心して安全に暮らせる老人ホームにするために、新たな体制を築いていくことが求められています。あすは我が身であると同時に地域の人の人権を地域で守るために、何をすべきか？　地域の住民一人一人が老人ホームにもっと関心を持ち関わっていくことが何よりも重要であることは言うまでもありません。

みんなで、誰もが安心して暮らせる
地域共生社会をつくりましょう

夢・ふれあい社会

公益財団法人
さわやか福祉財団

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい　いきがい　助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。
さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**
  さわやかパートナー（賛助会員）・
  ご寄付者の皆様のご紹介
- **さわやか**活動日記（抄）

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。
新規ご入会の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。
また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

（敬称略）（2024年4月1日～4月30日財団受付分）※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますことをご了承ください。

さわやかパートナー個人（66件）

（都道府県別50音順）

宮城県
佐藤 かつよ
渡部 孝雄

秋田県
菊地 恵子

福島県
阿部 洋子
猪狩 則子

栃木県
丹 直弘

埼玉県
小関 和夫
佐伯 昌子
佐伯 美穂英
酒井 勝男
友國 洋
中村 清子
向所 ふみ代
森戸 伸行
渡辺 敬子

千葉県
小澤 利政
川口 清
鈴木 章
原 武二郎
渡辺 誠

東京都
伊豆 幸美
稲川 寿子
大島 勝喜
加藤 良彦
木村 智都子
木村 大哲
清水 敦子
鈴木 慶子
鷹野 義量
戸田 信久
長尾 立子
長吉 多佳子
林 幹高
松尾 邦弘
宮部 敬子
吉岡 高志
和久井 良一

神奈川県
植谷 園子
岡本 淳
恩田 實
佐野 圭子
角井 佑子
平野 潤一

新潟県
河田 珪子

富山県
棚田 美智代

福井県
小野 昭男

岐阜県
榎本 豊

愛知県
大島 嗣雄
齋藤 みどり
瀬川 正俊
中山 隆雄

三重県
西村 美紀子

京都府
北村 哲也
中谷 武雄

大阪府
岡 保正
中下 肇子
光吉 順子

兵庫県
桑山 信子

岡山県
谷 敬子

広島県
島本 幸子

香川県
大藪 知恵子

福岡県
佐藤 須美子

長崎県
古賀 秀隆

大分県
髙木 佳奈枝

宮崎県
渡邊 ユミ

沖縄県
比嘉 玲子

さわやかパートナー法人（4件）

（50音順）

NPO法人青葉台さわやかネットワーク
医療法人社団潤康会芝パーククリニック
太平洋工業株式会社
NPO法人ゆいの会

一般ご寄付（1件）

（50音順）

大熊 康平（2千円）

子ども・子育て市民委員会ご寄付（1件）

（50音順）

野間 正記（3千円）

さわやか活動日記（抄）

地域支援事業の活動報告は、このほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SC＝生活支援コーディネーター

column

現役世代の地域参加について

さわやか福祉財団理事・丹　直秀

各地で高齢化が進み、地域で活躍しているシニア層やSCも後継者探しや新しいつながりづくりにご苦労されている。当財団が昨年10月に開催した「いきがい・助け合いオンラインフェスタ２０２３」でも、やらされ感なく参加できる地域活動について議論が深められたが、大きな目標である共生社会づくりへ向けては、まだまだ課題が多い。

そこでこの際、私の身近な体験から、現役世代の地域参加の可能性について考えてみた。一般的には、現役世代は多忙で地域活動など無理、とされる。しかし、「新しいふれあい社会の創造」にこそ、新しい世代の参加は欠かせない。では、どうすれば可能か。結論は、若い世代への評価を改め、世代を問わず、まずはお互いに身近なところから接点を増やしてみることではないか。

以下は、今年4月から5月にかけての私のささやかな体験と感想である。

「ご近所に越してきました」

ドアホーンが鳴った。玄関から出ると、門前に赤子を抱いた若いママさんと夫らしい男性が立っている。用件を聞くと、「近くに越してきましたので、ごあいさつに」とのこと。このあたりは、昭和50年代に横浜市のベッドタウンとして誕生した住宅団地で、今まさに高齢化と世代交代が進行中だ。それにしても家族でのご近所あいさつ回りは今どき珍しい。それから1か月ほど経った5月の連休。わが家に近い、空き家活用の居場所（サロット）に顔を出すと、同じママさんにバッタリ。聞くと、「地域の居場所」という看板に誘われて入ってみました、とのことだった。

…出来事はそれだけだが、後で考えてみると、この若夫婦との出会いには、今、各地で課題となっている「つながりづくり」「世代交代」、さらには「共生社会づくり」に関係するいろ

いろなヒントがあるように思える。

この夫婦（推定30～40代）の世代を前提に考えると、例えば、筆者のあくまで主観ではあるが次のようなことが言えそうだ。

1　この世代は、地域とのかかわりについて意外と真剣だ

2　あいさつなどの礼儀だけでなく、近隣との絆の大切さも理解している

3　その背景には、核家族で育った環境が影響しているのではないか

4　若いだけに「考える」だけでなく、行動力もある

5　ＩＴ世代だからこそ、人と人との直接的つながりを求める気持ちも大きい

6　「家」より「夫婦」「地域」が生活の基盤となっている

7　したがって、常設型の居場所（などの地域の受け皿）へ馴染みやすい

今回の経験は、私の住んでいる住宅地でのたまたまの例なのだろうか。それとも、全国各地での、これからの共生社会づくりの可能性につながる例なのだろうか。

いずれにしても、若い世代を含めた住民の地域参加をさらに広め、深めていくにはどうすればいいか、という課題は大きい。

「越してきました」「ようこそ」のあいさつがさりげなく交わされるような地域へ向けて、一緒に汗をかこう。

column

「ボランティア活動報告書の手引き」活用について
神奈川県立青少年センターと意見交換

神奈川県　共生社会推進担当・窪田　健二

4月上旬、当財団に神奈川県立青少年センターから「ボランティア活動報告書の手引き」を活用したい、という要望をいただいた。情報を探しているときに、当財団のホームページにある資料を見て、大変共感してくださったという。そこで、現場の意見を直接聞かせていただくため、4月26日に清水肇子理事長、大石敏晴事務局長と一緒に同センターを訪問し、指導者育成課の長南悠太主査と青少年サポート課の上野雅美主査のお二方と意見交換をさせていただいた。

報告書の記入項目が必要最小限に絞り込まれ、現場の感覚に合っている上に、

ボランティア活動をする本人とその受益者や現地で統率する人の双方のコメントが簡潔に記載でき、お互いの気づきが生まれる構成になっているところが良いとのこと。苦心して作成した意図を理解いただけており、大変うれしいことである。

「ボランティア活動報告書の手引き」は、本誌でも報告の通り、2021年11月に当財団が、広く生徒や学生、企業等に活用してもらおうと作成・発行したもの。「学生の地域活動研究会」の委員の皆様から学術的、実務的な立場から助言をいただいて完成した。「高校生・大学生用」「活動関係者用」「高校・大学進学・就職担当用」「大学入学者選抜担当用」「企業採用担当用」の5種類があり、自己の成長を確かめる記録であると同時に、自己の特性を具体的に第三者へ伝えるための資料になる。

　記入者が書きやすく、分かりやすいように工夫されており、記入者の活動実態によって項目の追加も可能にしてある。また「キャリア・パスポート」（文部科学省）、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（中央教育審議会答申）を参考に作成していることもあって、指導者にとっても使いやすいツールとなっている。昨年から、筑波大学でも学生向けの周知と配布に多大な理解をいただき、同大学の関連サイトや各種支援室で自由に活用できるように手配されている。

　私は、東京都教育委員会の研修生として当財団で活動している。学校現場では知的障害特別支援学校に勤務していた。このボランティア活動報告書は前述の通り、大変工夫されていて双方が取り組みやすいため、一番重要な活動前後の「変容」を確認することができる。そのため、振り返りツールとして最適である。

　これからの社会においては「自らの問題意識に基づき課題を設定し、主体的に解をつくり出す能力」が求められている。具体的には、

「ボランティア活動報告書の手引き」
（高校生・大学生用）

「主体性」「実行力」「課題設定・解決能力」「チームワーク・協調性」の項目が重視されている。これらの能力を育む場として、ボランティア活動は大変有意義である。当財団はボランティア活動を推奨し、この手引きが活動される方々のツールとして一助になることを願っている。

※「ボランティア活動報告書の手引き」は、当財団HPトップページ→「ライブラリー」→「提言報告レポート」よりダウンロードしていただけます。

各地・各事業の取り組みをご紹介します

ふれあい推進事業

第2層協議体再編を目的にワークショップを開催

■蓮田市（埼玉県）

【4月24日】 蓮田市で「高齢者になっても暮らしやすい地域を考える」ワークショップが開催された。参加者は、第2層協議体と地域住民の約100名。

同市では、すでに第2層協議体が設置され活動も進んでいるが、協議体設置から時間も経過していることから、あらためて助け合いの大切さを学び直すとともに、新たにやる気のある人を呼び込み協議体を再編することも狙い、このワークショップを企画した。助け合いに関心のある人に広く参加を呼びかけようと、市広報誌への掲載のほかに、ボランティア講座修了者、介護予防サポーターにも声をかけた結果、参加者の約半数が協議体以外からの参加者となり、市民の関心の高さがうかがえた。

冒頭、市在宅医療介護課の鈴木美和課長より、同市の高齢化率、一人暮らし高齢者の世帯数等が説明され、少子高齢が進む中で住み慣れた地域に安心して住み続けるためには、地域の中での見守りや助け合いが必要であり、「人と人がつながる助け合いの地域づくり」を住民の皆さんと一緒に進めていきたい、と話があった。

続いて、当財団より助け合いの大切さについて事例も交えて説明した後、ワークショップを実施し、「目指す地域像」と「地域課題」について話し合った。

ワークショップは1グループ6名程度とし、進行も住民が務め、住民同士で十分に話し合える環境とした。グループごとに大変活発な意見交換が行われ、途中か

らは山口京子市長も飛び入りで会場を訪れ、住民を応援したいとメッセージが送られた。

発表では、5つの第2層協議体圏域からそれぞれ1グループをSCが選出して、目指す地域像とその思い、また、その実現に向けた地域の課題が発表された。目指す地域像では、地域のつながりや、あいさつ・声かけ等による近隣での交流や顔の見える関係づくり、ほどよいおせっかいで気にかけあう関係づくりなどが挙げられた。地域課題では、自治会加入率の低下、地域のつながりや交流が少ないことが多く挙げられていた。

5月に財団も協力し、2回目のワークショップを実施する。その際、現在の第2層協議体メンバーも含めてあらためて協議体への参加意思をアンケートで確認し、希望者を中心に第2層協議体を再編成していく。

（岡野　貴代）

蓮田市のワークショップの様子

第2層協議体編成に向けワークショップを開催

■江東区（東京都）

【4月25日】 江東区において、大島7・8・9丁目を対象とした第2層協議体の設置に向けた第1回「支え合い大島東ワークショップ」が実施された。今年3月に準備会として一度勉強会を実施しており、今回はその準備会で助け合いに共感した住民とあわせて、新たな参加者への集客も行い、10名が参加した。

江東区社会福祉協議会地域福祉推進課長のあいさつに続き、この地区を担当するSCが高齢化率等の地域の状況を説明。SCは「大島地区は江東区の中でも75歳以上の世帯割合が最も高く、その分、高齢になっても元気に活躍している人が多い地区であり、皆さんと一緒に助け合いを進めていきたい」と話した。

続いて当財団より、助け合いの大切さについて説明した後、ワークショップの進行を行った。ワークショップでは、近い地域ごとに3つのグループに分かれ、目指す地域像を話し合い、その目指す地域像の実現に向けて地域にはどのような課題があるかを話し合った。

発表では、目指す地域像として、あいさつや食を介したつながり、井戸端会議のような気軽に相談ができ

る場、多世代交流がある場づくりなどが挙げられた。地域課題として、町内会活動や自治会への未加入者が多いなど、人と人とがつながる機会、人と地域がつながる機会が減ってきていることが出された。また、多世代が自然と交流できる場がなく、世代間のコミュニケーション不足などの課題も挙げられた。

5月にも財団が協力し、第2回ワークショップを実施する。次回は、課題解決のために必要な活動を話し合い、引き続き話し合いを続けたい人を中心に、大島7・8・9丁目の第2層協議体を設置する予定。

（岡野　貴代）

江東区のワークショップの様子

事務所だより

●7月8日に今年度の全国交流フォーラムを開催することが決まった。ご支援いただいている皆様に、当財団の日頃の取り組みをご報告する大切な機会。第2部の交流会とあわせてぜひご参加いただけますよう、財団一同、準備を整えてお待ちしております！

さわやか福祉財団は皆様のご支援によって活動しています

さわやかパートナー（賛助会員）として、ご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

個人会員、企業・団体等の法人会員ともに、どなたでもお申し込みいただけます。
税制優遇措置もあります。詳しくは、42ページをご参照ください。
◎１回ごとに金額を自由にお決めいただく一般ご寄付も、随時受け付けております。

ご寄付全般に関するお問い合わせ
電話（03）5470-7751
メール mail@sawayakazaidan.or.jp

みんなの広場

皆様のご意見や情報をお待ちしています

掲載記事へのご感想、地域の助け合いや居場所の情報、社会参加の取り組みや、日頃気になっているテーマなど、ぜひお寄せください。

送付先	さわやか福祉財団『さぁ、言おう』編集部宛 郵送の場合は、付属のハガキや投稿用紙をどうぞご利用ください。 E-mail：pr@sawayakazaidan.or.jp

自分で線路敷き SCは大変

埼玉県　髙橋　三夫さん（生活支援コーディネーター）

清水理事長の巻頭言をいつも興味深く読んでいます。4月号「生活支援コーディネーターの孤立と自治体の理解」、私の自治体も担当者がコロコロ変わるので困っています。生活支援コーディネーター（SC）経験者もおらず、自分で線路を敷いていますが本当に大変です。

神井孝子さんのエッセイ「狂った季節」も参考になりました。生活水準や快適さを〝犠牲〟にするのではなく、本来の人の生き方に戻すのだと考えてみてはどうでしょうか。

日々のお仕事、本当にお疲れ様です。SCは、これからの共生社会づくりに向けて住民主体の地域づくりをすすめるすばらしい職務ですね。人は本来、ふれあいやつながりの中でいきいきと暮らせるもの。これからもぜひ頑張ってください！　応援しています。

コメント　Keiko Shimizu

『さぁ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さぁ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人年会費	Aコース	10,000円
	Bコース	3,000円
法人年会費（1口）	Aコース	100,000円
	Bコース	20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます（さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です）。

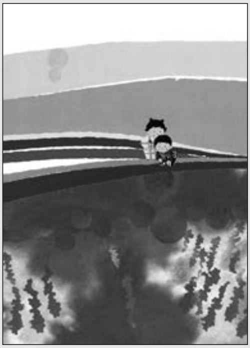
一般ご寄付をいただく場合のお振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団
郵便払込　００１２０-９-６６８８５６※
三井住友銀行　浜松町支店　普通預金　口座番号２７５４５７４
みずほ銀行　浜松町支店　普通預金　口座番号３３８３３２６
三菱ＵＦＪ銀行　浜松町支店　普通預金　口座番号３７３１７１４
りそな銀行　芝支店　普通預金　口座番号１１７４２９７

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。ただし、窓口にて現金（硬貨）でお振り込みいただく場合は、ゆうちょ銀行所定の取扱料金がかかる場合がございます。

＊お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話（03）5470-7751　メール　mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵から　はり絵・池田げんえい



「紫夢」

編集後記 ●「活動の現場から」は長崎県佐世保市のまち。２団体が連携して住民の安心を守っています（Ｐ４～）。●「こんな活動やってます！」は、首都圏ベッドタウンでのご近所の助け合いです（Ｐ10～）。●「子どもと一緒に地域で輝こう」は、竹林に集まる人たちの取り組みです（Ｐ14～）。●新潟市の地域包括ケア推進モデルハウス「実家の茶の間・紫竹」が活動を終了します。居場所の交流を地域の助け合いにつなげるための終了プロセスを今後お伝えしていきます（Ｐ20～）。●全国交流フォーラムにぜひお越しください！（表紙裏）

助け合いを
広げよう！

新ひとりごと

池口　武志

恥ずかしながら、還暦を迎えて初めて、
障がい者就労支援施設で
ボランティア活動に励んだ。
利用者さんへの
スタッフさんの細やかな係わりや、
頂いた感謝の言葉に感動。
幸いまだまだ元気だ。
社会への恩返しもしたい。

●一般社団法人定年後研究所所長
定年は職業人生の一里塚。
仕事も生活も、定年からが「人生最良のとき」といえる社会を築きたいと思っています。

さあ言おう　6月号

通巻370号	2024年6月10日発行 （毎月1回10日発行）	発 行 人	清水肇子
表 紙 絵	池田げんえい	発 行 元	公益財団法人さわやか福祉財団 〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階 Tel（03）5470-7751　Fax（03）5470-7755 E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp https://www.sawayakazaidan.or.jp Printed in Japan
取材協力	七七舎		
イラスト	すずきひさこ		
レイアウト	菊池ゆかり		
印 刷 所	日本印刷株式会社		

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

さぁ、言おう　6月号
令和6年6月10日発行
（毎月1回10日発行）
通巻370号
発行人　清水肇子
発行元　公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011　東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館7階

「地域助け合い基金」

皆様からのご寄付をお待ちしています

「地域助け合い基金」は、地域共生社会実現のため、地域における住民主体の助け合い活動を支援する基金です。日本国内の活動が対象で、分野は問いません。

また、支援したい自治体をご指定いただくことができ、能登半島地震の復興支援としてもご寄付いただけます。

皆様のご寄付をどうぞよろしくお願い申し上げます。

＜ご寄付の方法＞

（1）銀行振込・郵便振替によるご寄付

■銀行振込

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団　地域助け合い基金
三井住友銀行　浜松町支店　（普通）口座番号　７８５９４５２
三菱ＵＦＪ銀行　浜松町支店　（普通）口座番号　００９５４４６

■郵便振替（払込取扱票）

加入者名：公益財団法人さわやか福祉財団
口座記号番号　００１１０-７-７０９６２７

※銀行お振り込みの場合は、送金者の情報がカタカナ表記のお名前のみとなるため、当財団発行の領収書が必要な場合や地域の指定をご希望の場合は、お手数ですが「寄付申込書」を当財団宛お送りください。お電話でも承ります。
※ゆうちょ銀行（郵便局）の場合は、通信欄に、ご指定がある場合の自治体名と、ひと言応援コメントなどをご記入ください。また、払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

（2）クレジットカードによるご寄付

当財団ホームページよりお申し込みください。

＊「地域助け合い基金」では指定地域のないご寄付も常時募集しています。
＊「地域助け合い基金」は、さわやか福祉財団が事務手数料を頂戴することはありません。
＊「地域助け合い基金」をはじめとするさわやか福祉財団へのご寄付は、所得税・法人税等の優遇措置の対象となります。

助成応募については、当財団ホームページをご参照ください。
「寄付申込書」「パンフレット」なども、ホームページからダウンロードできます。

＜お問合せ＞
地域助け合い基金担当
電話：(03)5470-7751　FAX：(03)5470-7755
メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp